# 計画01 住宅一般 問-1

1 ☐ 一般住宅の計画において、車いす使用者が利用する場合、キッチンセットについては、L字型よりI字型のほうが使いやすい。

2 ☐ LD(リビングダイニング)は、日本の従来の茶の間に類するもので、空間を有効利用して、リビングとダイニングの機能を確保できる。

3 ☐ 設備コアによるコアプランは、居室部分を外壁に面して計画することが可能で、居住性を高めることができる。

4 ☐ 一般住宅の計画において、収納空間は収納するものの大きさに合わせて、奥行きがあまり深くない収納スペースを多めに計画し、延べ面積の10%を目安として確保する。

5 ☐ ファンズワース邸(ミース・ファン・デル・ローエ)は、コンクリートによる構造の特徴を生かした、ユニバーサル空間をもつ。

6 ☐ スカイハウス(菊竹清訓)は、4枚の壁柱に支えられた均質な空間に、取替えの可能な設備等の装置化された「ムーブネット」を取り付けた計画である。

7 ☐ から傘の家(篠原一男)は、方形屋根で覆った正方形の単一空間を用途によって分割した、造形性の高い全体構造をもつ。

8 ☐ ハーフウェイハウスとは、病院での治療・訓練を終了した患者等が、日常生活への復帰に向けてADL(日常生活動作)訓練を受けることのできる施設をいう。

9 ☐ シルバーハウジングとは、ライフ・サポートアドバイザーが配置され、高齢者向けの設備、緊急通報システム等が備えられた集合住宅である。

10 ☐ コーポラティブハウスは、自ら居住するための住宅を建設しようとする者が、協力して、企画・設計から入居・管理までを行う方式により建設された集合住宅である。

11 ☐ モビリティハウスは、車いす使用者の個々の障害の特性に対応するため、可変間仕切や上下可動の衛生設備等を備えた住宅である。

12 ☐ コレクティブハウスは、個人のプライバシーを尊重しつつ、子育てや家事等の作業を共同で担い合う相互扶助的なサービスと住宅とを組み合わせた集合住宅である。

13 ☐ 三世代住宅の計画において、親世帯のゾーンと子世帯のゾーンとの間に、共用部分として玄関のほかに応接室を設けた。

14 ☐ 三世代住宅の計画において、親世帯と子世帯の子供との生活時間帯が異なるので、子世帯の子供室の音が親世帯の部屋になるべく伝わらないようにした。

15 ☐ 三世代住宅の計画において、玄関の上がり框は、親世帯の高齢化を考慮して、その高さを2cmにとどめ、段差が目立たないように玄関土間と同じ色の材料で仕上げた。

16 ☐ 中廊下型住宅は、中廊下を設けることにより、動線を明快にし、各室のプライバシーを高めた近代の住宅のスタイルである。

17 ☐ 一室型住宅とは、第二次世界大戦後、機能主義による合理性の追求の中から住まいを原点から見直し、生活に必要な要素について最小限を追求した住宅のスタイルである。

18 ☐ コートハウスとは、中庭をもち、外部に対して閉鎖的な都市型住宅で、1950年代から60年代にかけて話題となった住宅のスタイルである。

19 ☐ 最小限住宅とは、炊事、食事、団らん、就寝等の空間が一体となっている第二次世界大戦直後の住宅のスタイルである。

20 ☐ コア型住宅とは、台所、便所、浴室、洗面所等を外壁に面してまとめて設けた1950年代の住宅のスタイルである。

21 ☐ 高齢者及び身体障害者の利用に配慮した住宅において、階段に手すりを設けるに当たり、両側に手すりを設ける余裕がなかったので、昇る時の利き手側に手すりを設けた。

22 ☐ 高齢者や身体障害者を配慮した住宅において、出入口の戸は引き戸ではなく、開き戸とした。

23 ☐ 卯建（うだつ）とは一般に妻壁を屋根面より高く突き出し、小屋根を付けた部分のことで建築の装飾としてだけでなく、防火性能を兼ね備えている。

24 ☐ 伝統的な農家の間取りにおいて広く用いられた四つ間型は、4室程度の部屋を廊下で結んだ形式である。

25 ☐ 伝統的な町屋においては、屋内の主要な通路として、道路から裏庭まで達する細長い土間を設けた通り庭形式と呼ばれる間取りが多い。

26 ☐ 一般に、京間は、柱心の間隔を基準寸法の整数倍とするが、江戸間は、柱と柱との内法寸法を基準寸法の整数倍とする。

27 ☐ 輪中とは、河川の氾濫する低湿地帯で、周囲に堤防を築き、集落と耕地を守る水防のための集落形態のことである。

28 ☐ 「塔の家」（東孝光、1966年）は、小面積で不整形な敷地条件に対し、住空間を機能別に積層して構成した都市住宅である。

29 ☐ G.T.リートフェルト設計のシュレーダー邸は、無彩色と青・赤・黄の三原色とが組み合わされたデ・ステイルの構成原理を具現した住宅である。

30 ☐ チャールズ・イームズ設計のイームズ自邸は、「うねる曲面を使用した内部空間及び外観」、「木の豊富な使用」、「周辺の自然との調和」をテーマとした住宅である。

計画01 住宅一般

1 × 車いすを回転させることだけで作業ができることから、L字型のほうが使いやすい。

2 ○ LD(リビングダイニング)は、日本の従来の茶の間に類するもので、空間を有効利用して、リビングとダイニングの機能を確保できる。

3 ○ 設備コアによるコアプランは、居室部分を外壁に面して計画することが可能で、居住性を高めることができる。

4 ○ 住宅の収納空間は間口が広く奥行きが浅いほうが使いやすい。一般的には延べ床面積の10～20%が適当とされている。

5 × ファンズワース邸は、外壁全面にガラスを用いた鉄とガラスの建築で、ユニバーサル空間といわれる。

6 ○ スカイハウス(菊竹清訓)は、4枚の壁柱に支えられた均質な空間に、取替えの可能な設備等の装置化された「ムーブネット」を取り付けた計画である。

7 ○ から傘の家(篠原一男)は、方形屋根で覆った正方形の単一空間を用途によって分割した、造形性の高い全体構造をもつ。

8 ○ ハーフウェイハウスは、病院での治療・訓練を終了した患者等が、日常生活への復帰に向けてADL(日常生活動作)訓練を受けることのできる施設をいう。

9 ○ シルバーハウジングは、ライフ・サポートアドバイザーが配置され、高齢者向けの設備、緊急通報システム等が備えられた集合住宅

10 ○ コーポラティブハウスよは、自ら居住するための住宅を建設しようとする者が、協力して、企画・設計から入居・管理までを行う方式により建設された集合住宅である

11 × 車いす使用者の個々の障害の特性に対応するため、可変間仕切や上下可動の衛生設備等を備えた住宅は、アジャスタブルハウスという。モビリティハウスは、車いす使用者等を対象とした段差の解消や通路幅の必要寸法が確保された住宅をいう。

12 ○ コレクティブハウスとは、個人のプライバシーを尊重しつつ、子育てや家事等の作業を共同で担い合う相互扶助的なサービスと住宅とを組み合わせた集合住宅である。

13 ○ 親世帯のゾーンと子世帯のゾーンとの間に、共用部分として玄関のほかに応接室を設けることで、生活ゾーンの分離を図ることができる。

14 ○ 親世帯と子世帯の生活時間帯の違いを考慮して、親世帯の部屋と子世帯の子供室とが隣接しない配置や遮音を計画することが望ましい。

15 × 玄関の上がり框は、車いすでも乗り越えられるよう段差を2cm以下とすることが望ましい。また、その段差を色や材料で識別し、つまづきや転倒を防ぐよう計画する。

16 ○ 中廊下型住宅は、中廊下を設けることにより、動線を明快にし、各室のプライバシーを高めた近代の住宅のスタイルである。

17 × 一室型住宅とは、炊事、食事、団らん、就寝等の空間が一体となっている第二次世界大戦直後の住宅のスタイルである。

18 ○ コートハウスとは、中庭をもち、外部に対して閉鎖的な都市型住宅で、1950年代から60年代にかけて話題となった住宅のスタイルである。

19 × 最小限住宅とは、第二次世界大戦後、機能主義による合理性の追求の中から住まいを原点から見直し、生活に必要な要素について最小限を追求した住宅のスタイルである。

20 × コア型住宅は台所、便所、浴室、洗面所等を建物の中心にまとめ、設備配管を単純化し、居住部分を外壁に面して配置した住宅のスタイルである。

21 × 階段の両側に手すりを設ける余裕がなく片側だけに設ける場合は、降りる時の利き手側に設ける方がよい。

22 × 開き戸の場合、出入口に対して前後に体の動きが大きくなるので、高齢者や身体障害者には適当でない。体の位置を変えずに開閉できる引き戸の方がよい。

23 ○ 卯建（うだつ）とは一般に妻壁を屋根面より高く突き出し、小屋根を載せたものである。町屋では建築の装飾としてだけでなく、防火の役目もあるといわれている。

24 × 伝統的な農家の間取りにおいて広く用いられた四つ間型は、土間に続く床上部分を建具などで4室に分割した平面形式であり、原則として廊下は設けられない。

25 ○ 伝統的な町屋においては、屋内の主要な通路として、道路から裏庭まで達する細長い土間を設けた通り庭形式と呼ばれる間取りが多い。

26 × 京間は、畳（3.15尺×6尺）を基準とした柱と柱との内法寸法を基準寸法の整数倍とする内法制である。江戸間は、柱心の間隔（3尺×6尺）を基準寸法の整数倍とする心心制である。設問には無いが、中京間も畳（3尺×6尺）を基準とする内法制である。

27 ○ 水害から守るため、集落や耕地の周囲を堤防で囲んだところをいう。岐阜県南部、三重県北部、愛知県西部の木曽川、長良川、揖斐川とその支流域の扇状地末端部から河口部に存在したものが有名。

28 ○ 。「塔の家」（東孝光、1966年）は、小面積で不整形な敷地条件に対し、住空間を機能別に積層して構成した都市住宅である。

29 ○ G.T.リートフェルト設計のシュレーダー邸は、無彩色と青・赤・黄の三原色とが組み合わされたデ・ステイルの構成原理を具現した住宅である。

30 × イームズ自邸は、「近代的構法と近代的生活様式に対応する住宅を計画する」とした実験住宅である。設問の「うねる曲面を使用した内部空間及び外観」、「木の豊富な使用」、「周辺の自然との調和」をテーマとした住宅は、アルヴァ・アールトです。